様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　23 年　6 月　6 日現在

機関番号：20105
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2009～2010
課題番号：21792180
研究課題名（和文）　アクションリサーチ（ＳＳＭ）による看護師教育支援：災害看護への動機づけ
研究課題名（英文）　Nurse education support using an SSM-based action research approach - motivation for disaster nursing
研究代表者
太田　晴美　（OTA HARUMI）
札幌市立大学・看護学部・助教
研究者番号：90433135

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、アクションリサーチ（ＳＳＭ）を用いて、災害看護への動機づけを相互支援するプロセスを明示することであり、有事の際に貢献できる看護師育成を目指す。ワークショップと実践を通して、「災害看護に対する思い」と「変化」を明確にし、ミニプロジェクトを計画し実践した。その結果、災害に関する仲間が身近にいることに気づき、相互支援となる仲間作りが可能となった。なお、2011 年 3 月の東日本大震災では、被災地支援・後方支援として、研究参加者が自ら率先して活動している。従って、本研究は有事の際に活動できる看護師育成に寄与できたと確信している。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to develop nurses capable of making positive contributions in emergency situations, and was based on the formulation of a process of mutual support to motivate such professionals toward involvement in disaster nursing. To achieve this aim, an action research approach based on soft systems methodology (SSM) was used. Participants in the study expressed their thoughts on disaster nursing and related changes through workshops and practice, and planned/implemented related small projects. As a result, their awareness of fellow workers around them in disaster situations was heightened, enabling them to build relationships that would underpin a system of mutual support. In the aftermath of the March 2011 Great East Japan Earthquake and the ensuing tsunami, the study participants acted on their own initiative, providing support and logistics assistance to devastated areas. Accordingly, the study was successful in contributing to the development of nurses capable of acting positively in emergency situations.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	2,400,000	720,000	3,120,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：基礎看護学
科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学
キーワード：災害看護　アクションリサーチ　ネットワーク　動機づけ

１．研究開始当初の背景

マグニチュード（地震の規模、以下 M）6 以上の地震が日本国内だけではなく世界各地で発生している。1995 年 1 月 17 日午前 5

時 46 分に発生した阪神淡路大震災（M7.2）では死者 6433 名と甚大な被害を記録した（2000 年 12 月 26 日消防庁調べ）。2004 年には新潟県中越沖地震、2008 年岩手・宮城内陸地震が発生している。また日本は多くの活火山を有し、2000 年に有珠山、三宅島雄山などが噴火し自然災害は後を絶たない。世界的に見ても 2006 年 1 年間で 27292 人が自然災害で死亡している。(Natural Disasters Data Book-2006)。科学技術の進歩により、自然災害の何割かは予測できるようになってきているが、災害発生の時期、規模、程度までを正確に予測することはできない。さらに 1994 年には松本サリン事件、1995 年地下鉄サリン事件、2001 年 9 月 11 日アメリカで起こった同時多発テロ、それに続く炭疽菌事件などの人的災害も国内外で発生している。このような現状から災害は原因が多様化し今後も減少することはなく、起こりうる災害に、いかに立ち向かうかが重要な課題である。

災害時に医療・看護は、人々の生命を守るために欠くことのできない活動である。1995 年 5 月 10 日厚生省（現厚生労働省）健康局長通知「災害時における初期救急医療体制の充実強化について」の中で『災害医療に関する普及啓発、研修、訓練の実施』について言及され、医療機関では災害対策を実施する施設が増加している。中原らが全職員を対象にした調査結果では、「職員の多くは災害に対する準備の重要性を強く意識しているが主体的行動を起こしていない現状がある」と報告されている（関東近郊の中規模病院における全職員の災害に対する意識調査　日本看護学会論文集看護総合 2007 p400-402)。臨床で働く看護師の多くは目の前の患者ケアや業務に追われ、災害について考える機会や、共に語り合い行動する仲間が少ない状況で、いつ起こるかもわからない災害に備えることが困難な状況にある。

研究者のこれまでの研究結果では、災害看護への動機づけの基盤となり、取り組みを維持するためには、ヒューマニズムやチャレンジ精神、看護に対する姿勢や思い、災害看護教育の充実、職場環境の改善、上司・仲間からの支援が影響することを報告した（災害看護への取り組みを支える要因の分析－看護師個人の動機づけとその維持－　太田晴美　北海道医療大学大学院看護福祉学部看護学研究科修士論文　1-47　2005）（災害看護への取り組みを支える要因の分析－災害看護に興味を持った経験のある看護師の動機づけ－　太田晴美　日本災害看護学会誌 Vol.9 No.1 80　2007)。災害拠点病院や看護職員が多くいる職場では災害看護について考える場、『仲間』を見つけることが比較的容易である。しかしながら中小規模の医療施設では、そのような場や機会が乏しく、施設内で共有できる『仲間』が少ない現状にある。一施設では少数であっても地域を一単位と考えてネットワークを作ることで、看護師個々の災害看護への動機づけを刺激することができると考える。

２．研究の目的

（1）看護師が災害看護に取り組む際の現実の問題と概念活動モデルを明確にする。現実世界とシステム思考を比較しながら、実行可能で具体的な活動モデルを提示する。

（2）定期的なネットワークを形成し、活動を通して、協働者の変化を評価し、相互支援の有益性を明らかにする。

（3）最終的に災害看護への動機づけを相互支援できるネットワークを構築するプロセスの有用性を評価し明示する。

３．研究方法

（1）研究デザイン

アクションリサーチ：ソフトシステム方法論（SSM）

アクションリサーチ（SSM）は、当時者が問題と思われる状況に改善をもたらすために、その状況にかかわっている人々の間に、原則として終わることのない学習サイクルを活性化させる、行為に関わる研究方法論である。

研究者自身が当事者として問題状況に直接関わり、参加者と共に行為的学習を獲得すると同時に、その学習を基に意識改革を促す方法論である。

（2）研究参加者

①研究協働者

災害看護への動機づけ維持のためにネットワーク構築に協働する看護師７名以上。（施設の規模、診療科、経験年数は問わない）。

②研究代表者

協働者と同等の立場で意見交換・内省を行う実践者の役割を兼ねる。

（3）倫理的配慮

研究協働は、個人の意思に基づき協力を拒否すること、途中で辞退することができる。守秘義務を遵守し、データは個人が特定できないように取り扱う。研究結果は研究目的以外に使用しない。札幌市立大学倫理委員会の承認を受けて実施。

（4）研究方法

①2009 年度

12 名の研究協働者に参加してもらい、SSM ワークショップ a.「思い」を表現し、思いのモデルを用いて「思い」のアコモデーション（２日間） b.比較表を用いて訓練ポイントの導出（１日間） c.災害看護教育（訓練）：

ブレインストーミング・エマルゴトレーニング（1 日間）、 d.災害看護訓練実践による気づきの振り返り、「思い」のアコモデーション（２日間）を行った。参加した人々の思いの変化、各ステージでの学びを明らかにした。

②2010 年度

災害看護に対する「思い」が一定期間を経た後に、どのように変化するかを明確にし、災害看護への動機づけを維持するためのプロセスを評価し明示することを目的とした。

2009 年度に協働した 6 名に新たに 3 名を加えて 9 名でワークショップを展開した。 a.一定期間（1 年間）経た後の災害看護への「思い」を絵（リッチピクチャー：RP）で表し、この 1 年間の振り返り b.災害看護への「思い」のアコモデーション c.ミニプロジェクトの構想と発表 d.ミニプロジェクトの実践 e.実践内容の発表 f.災害看護への思い RP 作成 g.学びと課題というプロセスで実践した。

４．研究成果

（1）2009 年度

①リッチピクチャー(Rich picture:RP)による参加者の「思い」の表現

研究協働者が災害看護についてどのように感じているか日々の経験の中での思いを表し発表、ディスカッションした。（図 1）

②「思いのモデル」を用いてアコモデーション（共有）、ブラッシュアップする。

研究協働者を３つの班に分け「災害看護に関わるとはどういうコトか」について、a.Z:〇〇するために（Ｗｈｙ）、 b.Y:〇〇することによって（How）、 c.X:〇〇すること（What)をグループメンバー全員で腑に落ちるところまで話し合いをする。グループの思いのモデルをプレゼンテーションし、他グループからの意見をもらう。その意見を参考に「思いのモデル」をブラッシュアップして生成させた。

Z:自分がやりたいと思う気持ちの達成感を得るために Y:こわい・自分の不安な気持ちを自分で乗り越えて、自分の力を出し切ることによって X:みんなの看護師として燃える！！

表 1　思いのモデル一例

③「思い」と現実の比較

作成されたグループそれぞれの「思いのモデル」を現実世界の中では、どのように行われ、評価されているかを検討する。議論された内容から「気づき」を大切にし、メンバー全員が腑に落ちるまで議論した。

④「思い」から「気づき」を得て、災害看護教育（訓練）ポイントの導出

個人の思いから、グループの思いが導かれ、さらにワークショップで議論を重ねることで、研究代表者・協働者間で一致した思いに達することができた。 a.現実に近づく機会づくりとその手段、 b.チームの組織と連帯、c.コミュニケーションと情報管理、 d.現場での自己管理と看護師としての意識、 e.災害看護の範囲、 f.日常の看護業務と災害看護のつながり、という 6 つの災害看護教育(訓練）ポイントが導出された。（表 2）

参加者のニーズ	実践ポイント
現実に近づく機会作りとその手段	エマルゴ、患者写真、状況写真 短時間での判断
チームの組織と連帯	自分たちで持ち場を決める チームビルディング 作戦会議を持ったうえで実践・連携・協力
コミュニケーションと情報管理	通信手段の限定 座学を行なわない(実践から学ぶ)
現場での自己管理と看護師としての意識	現場でのイメージ 自己管理・役割意識
災害看護の領域（範囲）	ケアを考える、ケアの視点 日常業務とのつながり
日常の看護業務と災害看護のつながり	実践の中で感じ取る 1回目終了後にレクチャーを入れる ランチタイムの活用

表 2　災害看護ニーズと教育（訓練）ポイント

⑤災害看護教育（訓練）の実践

導出された 6 つの災害看護教育（訓練）ポイントを考慮した教育（訓練）内容を策定し、実践した。

a.ブレインストーミング

災害現場に派遣する人を短時間で決める、現場に行くまで何をするか考える。

b.飛行機事故シナリオで、エマルゴトレーニングシステムを用いて午前・午後同じ内容の訓練を実施。

c.炊出を実施し、参加者が同じ経験を共有する。

⑥災害看護教育（訓練）実践による気づきと「思い」を RP で表現し発表、ディスカッションし共有した。（図 2）

⑦継続的支援に関するニーズ把握

災害に対する思い（感情）が揺さぶられることで、表面的な思いが強い（心のこもった）思いになることが明らかとなった。しかしながら、災害は日常に起こっているわけではなく、日常の看護と災害看護を連動させた教育が重要になることがわかった。

また SSM は学習者のニーズを基にした教育を実践することに寄与し、看護師の災害看護への動機づけに役立つ可能性がある。特に、SSM を用いた本音の議論は協働者を仲間として結び付け、災害への動機づけに影響を与える。

(2) 2010 年度

①災害看護への「思い」の表現（RP）

前年度のワークショップ以降、通常の臨床看護業務に従事していた看護師が、再度集まって RP を描いた。昨年度、災害看護への「思い」を強く動機づけられた看護師の「思い」の変化を表現した。(図 3)

②ミニプロジェクト作成

参加者それぞれが、災害看護への思いを元に、「日常看護と災害看護結びつけることはどういうことか？」について個々が実践できるミニプロジェクトを作成した。

ミニプロジェクトは、 a. テーマ、 b. なぜこのテーマなのか（思い）、 c. どうやってこのテーマに関わるか、という視点で作成し、プレゼンテーションとディスカッションを行い、作成したミニプロジェクトが現実に実行可能なプランに修正した。

③ミニプロジェクト実践

研究協働者は、個々に作成したミニプロジェクトに基づき 3 ヵ月間実践を試みた。

④ミニプロジェクト実践結果

ミニプロジェクトに基づき、実際に活動行うことができた協働者は 4 名であった。これまで災害看護に興味を示してくれる「仲間」が身近に感じられず孤独感を感じていたが、活動を通して、予想以上に興味を示してくれる「仲間」の存在に気づくことができた。

またミニプロジェクトの計画通りに実践できず、途中で停滞していた人は、「自分は災害に対する取り組みの働きかけが難しいのはなぜか、他の人はどうやっているのだろうか」を本研究協働者と集まって、考える機会を設けていた。その結果、現場でどのように a. 関心を持ってもらうか、 b. 浸透させていくか、 c. 仲間を見つけるかが、災害看護に関わる人の動機づけに関わることとなるということがわかった。

⑤ミニプロジェクトと本取り組みによる気づきと「思い」を RP で表現し発表、ディスカッションし共有した。(図 4)

(3) 研究協働者の学び

【図 1：研究開始当初の RP】

【図 2 ：災害看護教育（訓練）後の RP】

【図 3 ：1 年後の RP】

【図 4 ：本研究終了時の RP】

(4) 研究代表者の学び

参加者の思いから導かれたニーズに基づく教育（訓練）を実践することにより、実感ある気づきが触発され、災害看護について実践から学ぶ（laeaning by doing）ことができた。

体験的に気づいたこと（実感ある気づき）は、数週間経ても、イキイキと語ることができる。

教育（訓練）に参加者の思いに基づいた項目を方法論的かつ意識的に取り入れることで教育効果が上がることが分かった。

ミニプロジェクト作成においては、災害への意識が高まっている人が作成するため、「これができる」「あれができる」と過大なプランが多かった。これは、災害への「思い」が強く動機づけられていたことから、本取り組み協働者が有効なネットワークを形成し、議論展開していたため、現実場面でも「簡単に実践できる」と感じたのではないかと考える。

したがって、災害看護に興味のある人が本音で議論を重ねることはネットワーク形成や動機づけには大いに有効である。

(5) 付記

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災の被災現場・後方支援に研究参加者が自ら率先して活動している。本研究は有事の際に活動できる看護師育成に寄与できたといえる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計　3 件）

①太田晴美、SSM ベースのアクションリサーチを用いた災害看護教育－参加者の思いをもとにした教育（訓練）からの学び－、第 16 回日本集団災害医学会総会・学術集会、2011 年 2 月 11 日、大阪国際交流センター

②太田晴美、SSM ベースのアクションリサーチを用いた災害看護教育－参加者の思いをもとにした教育（訓練）の実践－、第 16 回日本集団災害医学会総会・学術集会、2011 年 2 月 11 日、大阪国際交流センター

③太田晴美、アクションリサーチ（SSM）による看護師教育支援、第 4 回 JAAR シンポジウム、2010 年 2 月 28 日、大東文化会館（東京）

６．研究組織

(1)研究代表者

太田　晴美（OTA HARUMI）

札幌市立大学・看護学部・助教

研究者番号：90433135

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：